日本文学翻訳の様相と研究の行方

李漢正

✉ ehj@smu.ac.kr

The translation of Japanese literature in Korea did not receive much attention during both the transitional era to the modern world and the Japanese colonial era. During this time most works of literature were simply adapted, but not translated. The anti-Japanese policy of the Rhee Syngman Government caused the translation of Japanese literature to be neglected in the period between Korea's liberation from Japanese colonial rule and the 1960s. In subsequent years, a substantial number of complete works, selections, and novel sequences were translated in different forms between the time of the 4.19 Revolution and the 1980s. Most of these translations were introduced in support of the policy of 'knowing Japan'. The translations of the work of Murakami Haruki greatly influenced Korean literature in the 1990s. Moreover, during the planning stages of the translation of the complete works of Kenzaburō Ōe, an author who was awarded the Nobel Prize in Literature, translations were required to promote 'cultural exchange' between Korea and Japan as well as an 'understanding of Japan'. However, the translation of works by Murakami Haruki, including his lengthy detective novels, was more likely driven by consumption, rather than by a desire to promote cultural exchange. The complete works of individual authors such as Dazai Osamu, Soseki Natsume and Ryunosuke Akutagawa have been translated since 2005. Moreover, most of the main classical works of literature have also been translated. It can therefore be said that the translation of Japanese literature has been enjoying its golden age. These efforts have led to the

consumption of many different translated works of Japanese literature in Korea. However, the critical literary evaluation of translated works is still in its infancy and has mainly focused on drawing attention to errors in translation and mistranslation. In fact, the level of evaluation has not exceeded the result of a study, 'The Status and Analysis of 60 Years of Japanese Literature Translation'. Of late, the evaluation of literary translation in Korea has been moving in the direction of translational criticism; hence, the study of literary translation has reached a new turning point. With these developments in mind, a study of the translation of Japanese literature was conducted from multiple perspectives and evaluated against translational theories with the aim of extending the scope of Japanese studies.

Keywords Translation in the selections(全集翻訳), River novels(大河小説), Knowing Japan(日本を知る), Cultural exchanges(文化交流), A study of literary translation(翻訳研究)

1. 翻訳の不在と過剰

1945年から2005年までの韓国内における日本文学の翻訳の現状を探究した「日本文学の翻訳60年：現状と分析」の序文でユン・サンインは「大衆文学、純文学を問わず、韓国の成人読者の外国文学読書総量で日本の小説が占める割合は、最も大きい」という事実にもかかわらず、「日本小説移入様相が正確に取り上げられなかったという自覚と反省こそがこの本の出発点」だと述べた¹。203ページの分量の「解放後の日本文学の翻訳現況調査1945～2005」を付録として載せているこの本は、2006年から2009年までの翻訳状況データを補完、翻訳作品のソーステキスト本を追加で調査し、2012年には日本でも出版された²。日本文学の翻訳は、2009年以降も継続的に増加しており、決して減少していない。大韓出版文化協会の資料によると、2010年と2011年において日本文学は、それぞれ800種以上が継続的に翻訳されたという³。

本稿では、開化期以降から現在までの韓国内における日本文学の翻訳の流れを文学全集・選集、大河小説、村上春樹作品、推理小説、作家全集、古典文学の翻訳を中心に概観する。またこれらを通じ、その翻訳、日本文学翻訳における評価と研究の現状を確認し、方向性の提示を試みる。文学全集や大河小説、主要作家などの翻訳は、韓国における日本文学翻訳の量産要素として作用し、様相を把握するのに重要であると言えるが、未だこの点に注目した分析は行われていない。本稿は、この点に主眼を置くことにより翻訳の流れを捉え、日本文学の翻訳が「日本理解」と「文化交流」という名で行われている現象を検討するものである。これまでの翻訳作品に関する評価や研究が、翻訳作品の原文対照に留まっていたという現状を確認し、今後の翻訳研究の行方を探る。

19世紀半ばから20世紀初頭にかけての半世紀の間、日本が翻訳という手段を介して近代化の過程に伴う西欧文明を積極的に受け入れたという事実は十分知られている。また、柄谷行人が指摘したように、日本の近代文学は、「翻訳」を媒介としていなかったら成立することが不可能だった⁴。このように、翻訳が、他者と出会う現場の最前線に位置するという事実は看過することができない。ところが、近代に入って、韓国と日本は緊密な他者として遭遇したが、お互いの出会いに翻訳が及ぼした影響はそれほど大きくない。近代初期に日韓両国の文学翻訳は、その範囲や分量は少数に過ぎなかった。

韓国文学の日本語訳は、半井桃水が1882年6月に『鷄林情話春香伝』を『朝日新聞』に20回連載したことから始まった。日本文学が韓国に翻訳、紹介されたのは、1883年に日本で出版された矢野龍溪の『経国美談』である。この作品は、1904年に『漢城新報』に翻訳者

1 윤상인 외『일본문학 번역 60년 현황과 분석』(소명출판, 2008), p.4

2 館野哲・蔡星慧 譯『韓国における日本文学翻訳の64年』(出版ニュース社, 2012).

3 김보라『2000년대 일본문학의 국내 번역 출판 양상과 베스트셀러 요인에 관한 연구』(중앙대학교 석사논문, 2012), p.17. または 2014年6月29日『聯合ニュース』は「教保文庫によると、日本小説は、2006年以降、全体の小説市場で着実に20%前後のシェアを維持している。」という事実を伝えている。

4 가토 슈이치・마루야마 마사오, 임성모 역『번역과 일본의 근대』(이산, 2000), 柄谷行人「翻訳者の四迷—日本近代文学の起原としての翻訳」(『国文学』第46巻第10号, 2004) 参考。

不詳で連載されたが未完で終了し、1908年に玄公廉の翻訳で『経国美談』単行本として刊行された。韓国文学の日本語訳は、日本文学の韓国語訳よりも早い時期に行われた。半井桃水が『鷄林情話春香伝』を翻訳したことは、桃水による韓国に対する興味と、当時の日本の勢力拡大と相まっている⁵。『経国美談』は、中国と韓国で同時期に出版された本⁶であり、東アジアの緊迫した情勢の中における、「政治小説」の需要から翻訳された。この後、尾崎紅葉の『金色夜叉』が1913年に趙重恒が『長恨夢』として翻案、出版され、本格的に日本文学が韓国に紹介された。しかし、「翻訳」ではない「翻案」として、今も人々の脳裏に残っている『長恨夢』の主人公は、「李守一(イ・スイル)と沈順愛(シム・スネ)」である。『金色夜叉』の「貫一とお宮」は名前が変えられ、見慣れない日本文学ではない、韓国式に翻案された日本文学が韓国人の日常に自然と流入したのである。日本でも近代初期には、翻案を通して西洋文学を受け入れたが、その受容方式は、最終的に「翻訳」に傾いた。しかし、韓国の日本文学は、翻訳より翻案の形態が多く、特に家庭小説が目立った⁷。徳富蘆花の『不如帰』は趙重恒によって、韓国翻案本『不如帰(ブルヨギィ)』として出版されたが、日本植民地時代における日本文学の翻訳は非常に低調だった。翻訳されたとしても、新聞連載にとどまらず、それさえも省略、加筆、内容変更などが行われた⁸。単行本の翻訳は、1939年に戦争文学の代表作である、火野葦平の『麦と兵隊』が朝鮮総督府の日本人によって『麦と兵丁』というタイトルで韓国語に移され、戦時状況を高揚させるために、市販で流通されている程度であった。ところが、その1年後の1940年には、金素雲の『乳色の雲 朝鮮詩集』(河出書房)をはじめとする、『朝鮮小説代表作集』(教材社)、『朝鮮文学選集』(赤塚書房)などが日本で相次いで出版され、以降、李光洙・金東仁・李孝石・李泰俊・蔡萬植など、当時の朝鮮で活躍した作家たちの詩と小説が日本語に翻訳され、1943年には『朝鮮国民文学集』(東京書籍)などの出版が続いた⁹。夏目漱石や森鴎外など、当時の日本近代作家の作品が、ほとんど韓国語で翻訳されなかったのに比べ、多数の韓国近代作家の作品が日本に移動したのである。

日本文学の翻訳は、日本植民地時代にはほとんど行われていなかった。このような状況は、植民地解放直後から1960年まで、李承晩政府の排日政策など、国内情勢の影響で続いた。これが、四月革命(4.19革命)を経て1960年代に至り、洪水が溢れ出るように大量に翻訳され始めた。この様相は、日本植民地時代から植民地解放直後まで、10年余りの日本文学の翻訳空白期間を白紙にする翻訳出版市場として作り上げられた。

⁵ 櫻井信栄「半井桃水…鷄林情話春香傳について」(『日本文学』vol.31, 동국대일본학연구소, 2010), p.225.

⁶ 양희·티안밍「정치소설 경국미담의 동북아 연쇄 번역 양상 연구—순한글판 및 상무인서관 단행본 경국미담을 중심으로—」(『한국문예비평연구』vol.43, 한국문예비평학회, 2014) 参考。

⁷ 권정희「일본문학의 변안—메이지 '가정소설'은 왜 번역이 아니라 변안으로 수용되었나」(『아시아문화연구』vol.12, 경원대학교아시아문화연구소, 2007), p.207, p.223.

⁸ 1922年の新聞連載小説である菊池寛「火華」が同時期に「火華(ブルコッ)」として『毎日新報』に翻訳、連載されながら発生した抜け落ちなどに関しては、이민희「식민지기 제국 일본문학의 번역 양상—1920년대 신문 연재소설「불꽃(火華)」과 「불꽃」을 중심으로」(『비교문학』vol.62, 한국비교문학회, 2014)から知ることができる。

⁹ 임미진(2012), 「번역」을 둘러싼 제국일본과 식민지조선의 정치—1940년대 일본에 소개된 조선소설을 중심으로, 민족문학사연구vol.48, p.194.

1960年代、日本文学は、爆発的と言えるほど翻訳された。日本文学の翻訳は、全集・選集の形態、または単行本として量産されたが、一部の単行本は、この時期に着実にベストセラーリストに名を連ねていた。1960年代の日本文学の翻訳が韓国社会に及ぼした影響を究明したカンウ・ウォンヨンは「1960年代には日本文学ではない、翻訳された『日本文学』が韓国の文学界を占めていたといっても過言ではない。」と述べ、「朝鮮戦争以降、目に見えた成長ができず、多様性が欠乏した韓国文学の『枯渇』がこの『日本文学』を素早く吸収する内的動機として作用した」と分析した¹⁰。この頃に出版された日本文学の翻訳を全集と選集だけ取りまとめてみると、『日本戦後問題作品集』(新丘文化社、1960)、『日本芥川賞小説集』(新丘文化社、1960)、『戦後日本文学選集』全2巻(科学社、1960¹¹)は、『日本文学選集』全5巻(1960-61、6巻、7巻は1963)、『戦後日本新人賞受賞作品選』(隆文社、1961)、『日本傑作短篇選集』全2巻(文興社、1960)、『日本新鋭文学作家受賞作品選集』全5巻(青雲社、1964、『戦後日本短篇文学全集』として日光出版社から1965年再出版、『日本受賞文学全集』として豊南出版社から1968年に再々出版)、『最新日本文学作品選』(受験社、1966)、『日本代表作家百人集』全5巻(希望出版社、1966、『日本短篇文学全集』として新太陽社から1969年に再出版)、『川端康成全集』全6巻(新丘文化社)に至るまで、非常に広範囲で多数の日本作家作品が翻訳された。1960年代の日本文学は、日本植民地時代における少量の翻訳と植民地解放直後の翻訳の不在状況がなかったことのように、無差別に翻訳されたのである。このような日本文学選集と全集の叢書には鄭漢淑、辛東門、金東立、吳尙源、桂鎔默、安壽吉、崔貞熙、鮮于輝、鄭漢模、車仁石、李元壽、吳尙源、イ・ Cholホ、金龍濟、崔仁勳、金洙暎、キム・セファンなど、当時の現役作家が参加している点も看過できない。日本語を読解できる世代が、日本語を知らない世代のために、日本文学を積極的に紹介する形であった。文芸評論家の白鐵は日本文学の翻訳は、西洋文学一辺倒を脱し「アジア各国の自主的な文学運動の意識」を明確にするために「日本の文学作品の質的なものを正当に評価して交流することは、韓国の現代文学のために必要な課題だ」と述べている¹²。しかし、大河小説の形の日本文学の翻訳が大量に産出され、白鐵が述べている「韓国現代文学」のための日本文学の役割が衰退してきている。日本文学の翻訳が立身出世や日本を知るための手段として糊塗される局面がもたらされるからである。

10 강우원용「1960년대 일본문학 번역물과 한국-『호기심』과 『향수』를 둘러싼 독자의 풍속-」(『일본학보』제93집, 한국일본학회, 2012), p.92. または同一著者「1960년대 초기 베스트 셀러를 통해 본 일본소설 번역물과 한국독자: 히라다 아쓰코, 이시자카 요지로, 박경리를 중심으로」(『일본학보』제97집, 2013)を参考。

11 科学社版全2巻は、原田康子の『挽歌』1巻(李顯子訳)と石原慎太郎『太陽の季節』第2巻(千世旭訳)を指すが、この『戦後日本文学選集』のシリーズ名をつけた作品として金秀一訳で改題閣から出版された『挽歌』(1960)をはじめ、原田康子の『輪唱』(李星姫訳, 立文社, 1960)、望月一宏の『反抗期』(李元一訳, 哲理文化社, 1960)、原田康子の『聖少女』(崔哲訳, 恵明出版社, 1967)、原田康子の『歓喜』(상지사원집부訳, 上智社, 1967)などがあり、『戦後日本文学叢書』で出版された五味川純平の『人間の條件』全3巻(李容求訳, 一友社, 1961)がある。1963年に三協出版社で出版された『人間の条件下』(李容求訳)は『戦後日本文学全集』という名前がついている。

12 백철「어느 外國文學보다 우선 日本文學을」(『日本短篇文学全集』V, 新太陽社, 1969), p.4.

2. 「日本を知る」ということの代用物としての大河小説

1960年代に始まった日本文学全集と選集の発刊は、1970年代と1980年代に入ってから、多少減少したが、継続的に続いた。1973年には『戦後日本代表文学全集』（平和出版社）と『現代日本代表文学全集』（平和出版社）が同じ原作の翻訳書籍でありながらも、同一出版社から他のシリーズの名前で出版されており、1960年代に出版されたものの再出版である『日本文学選集』が1973年、韓国読書文化院から出た。特に、1975年東西文化院から、新たに『日本文学大全集』全10巻が、出版されたことが注目される。この全集はその後、1978年に呉浩出版社からも出版され、1986年には、『日本代表文学全集』という名で、韓国教育出版社から出版された。次の章でも見ていくように、1980年代に入ってから「日本文学全集」という形式の出版は、姿をくまますが、1990年以降も、文学選集と個人全集の出版が続いた。大河小説の形式をとった歴史小説や企業小説などは、日本文学全集と選集の発刊が減少したことにつれ、その場を埋めるように、1970年代と1980年代に大量出版された。これらの大河小説は日本でも出版されることがない「大望」のようなタイトルをつけられ、雨後の筍のように登場した。

国内で出版された日本の大河小説は経済大国、日本への関心からはじまり、それにつれて韓国の経済成長の中で出世を夢見る人々に広く読まれてきた。1974年から1975年にかけて全46巻で出版された李京南訳『人間経営』は梶山季之の小説を翻訳したものである。1巻－無銭創業、2巻－立志突破、3巻－財覚破型、4巻－経営速戦、5巻－千面能手のように、このシリーズの各巻のタイトルは、四字熟語に似ていて、45巻－独立獨走と、46巻－人間完成の二冊は、柴田錬三郎の本を訳したものが割り込んでいる。もちろん梶山季之の日本語版『人間経営』は存在しない。韓国語翻訳本のタイトルとは全く異なる梶山季之のいくつかの単行本を集めて出版したものが『人間経営』であり、この大河小説は1975年に東西文化社で全10巻、1978年に學進出版社で全30巻、1986年には呉浩出版社で全15巻などそれぞれ異なる形で重複出版された。これらの企業小説は、梶山季之の作品の翻訳だけでなく、他の作家の作品も後に続いた。1975年には康曙海訳『企業小説経営大望』が鮮京圖書公社から全20巻で出版されたが、各巻は1巻－百戦百勝、2巻－最高機密、3巻－黒子経営、4巻－計略達道、5巻－無資巨富、6巻－快男大成、7巻－快速突破、8巻－七顛八起、9巻－經世大望、10巻－雄壯大器、11巻－盲人重役、12巻－人生三昧、13巻－巨物大欲、14巻－惡人設計、15巻－假名會社、16巻－商略達人、17巻－投機大業、18巻－社長天下、19巻－上流人生、20巻－虚業集團で構成されている。『企業小説経営大望』は城山三郎(1、3、11、14、16、19)、清水一行(2、4、10、12、15、17、20巻)、梶山季之(5、9、13、18巻)、柴田錬三郎(6、8巻)の4人の作家の本を集め、編集して出版したものである。当然のことながら、日本には存在しないものであり、1980年には、『現場小説人間大望』というタイトルで韓国法曹社から再び出版された。この本に書かれた翻訳の序文「人間勝負の經典」には、「企業小説」を次のように紹介している。

企業小説は、企業経営に伴うすべての人間の力学(人間力学)を主題にし、より次元の高い人生経営の現場をリアルに原色的に表す小説である。また、猛烈人生の経世小説でもある。(中略)競争時代に生きている現代人の本性を鋭く暴きながら、人間の赤裸々な姿と組織の冷酷さを告発し、今まで見ることのできなかった衝撃的な新しい人間像を創造する<すばらしい新世界>がまさにこの企業小説である¹³。

このように「経世小説」の役割を担う、いわゆる「企業小説」は、競争社会を生きる人々の自画像を描くように、同類の本を集めて「大河小説」の形で翻訳された。梶山季之の作品が入ったこのような大河小説だけ列挙してみても、『新人間経営』全16巻(1978)、『大物人間』全16巻(1976)、『立地實録新大物』全16巻(1976)、『大人間経営』全20巻(1981)、『大命』全5巻(1985)、『大物人間』全6巻(1999)などがある。

これだけでなく、山岡荘八『徳川家康』¹⁴の韓国語訳は、『大望』(1970)、『大野望』(1973)、『大雄』(1979)というタイトルで翻訳されており、同一作家の『織田信長』は韓国語翻訳版『大馬鹿』(1971)に翻訳された後『大傑』(1983)、『英雄の大業』(1985)、『大顎』(1983)という「大」の字を入れたタイトルを変えて次々と出版された。山崎豊子の『華麗なる一族』と『不毛地帯』も二作品をまとめて大河小説の形にした『大河小説大閥』(1979)、『大財閥』(1982)というタイトルで翻訳され、吉川英治の『宮本武蔵』は『大人』(1982)に、『新平家物語』は『大河歴史長篇小説大道』(1993)というタイトルで翻訳出版された。司馬遼太郎の三作品『燃えよ剣』、『歳月』、『翔ぶが如く』と子母澤寛の『勝海舟』を一つにまとめて翻訳出版したのが『実録大河小説大業』全29巻(1981)である。この本の翻訳者、ホ・ムンヨルは次のように述べている。

<大業>の真価は、政界、企業界、軍部、社会など、すべての分野で経済のパイブルという評価まで受けた<大望>をはるかに上回っているということである。ある武将が天下の大権を握む話が<大望>であれば、現代の政治、経済、軍事、文化、社会の源流が胎動して形成されている話がまさに<大業>だからだ。(中略)<大業>を完全に理解するためには、その水源池といえる<大道>の世界と、本流である<大望>の世界を知ることが大きな手助けとなるだろう。混乱以外の何物でもない戦国乱世で、世界第二の経済大国に発展した、日本近代国家が形成されるまでを一貫して理解することができる、この三部連作の通読をお勧めしたい¹⁵。

ここで言う<大望>は、山岡荘八の『徳川家康』の韓国語訳を指す。<大道>は、おそらく山岡荘八の『豊臣秀吉』を翻訳した作品ではあると考えられるが、実物は確認できな

¹³ 城山三郎・康曙海譯『現場小説 人間大望』1百戦百勝(韓国法曹社, 1980), p.2.

¹⁴ 山岡荘八『徳川家康』は、1950年3月から1967年4月までに『北海道新聞』、『東京新聞』、『中日新聞』、『西日本新聞』に連載された。1953年から単行本出版を機会にベストセラーとなり、1967年に全26巻で完結、1970年に韓国語翻訳版が出版された。

¹⁵ 許文列「大轉換期の 政治革命・經濟革命・人間革命의 이야기」(『실록대하소설 大業』(三韓文化史, 1981), p.2, p.12.

かった。この解説は、<大望>など、当時、大河小説の翻訳がどれだけ横行していたかを証言していて「経済大国」「日本」を「理解」することができる本として<大望>、<大道>、<大業>を紹介している。

「大」の字をつけた翻訳本のタイトルは、企業小説や歴史小説だけでなく、推理小説にも表われる。原作を知ることができない松本清張の作品が『大男』全10巻(1976)というタイトルで翻訳されており、松本清張をはじめとする城山三郎、清水一行、黒岩重吾の作品をまとめて出版した『大勝負』も1巻―欲望軍國、2巻―人生階級、3巻―原色地帯、4巻―野性時代、5巻―人間勝負などのタイトルをつけて全14巻で翻訳出版された。「大」の字を活用した翻訳本は織田信長の話を盛り込んだ津本陽の『天下は夢か』(1986年12月1日から1989年7月30日までの32ヶ月間『日本経済新聞』に連載された小説)を1993年に『大夢』全5巻(毎日経済新聞社)というタイトルで出版していることから、1990年代まで流行のように続いていたということが分かる。これらの韓国版の日本「大河小説」は、次の翻訳者の言葉に示されているように、韓国内では「日本を知る」という書物としても消費された。

なぜ今日の日本の政治家、企業、会社員、公務員、学生、軍人、ジャーナリストたちが津本陽の「織田信長」を耽読しているのか。私たちは、このような「信長シンドローム」を他国で起きた出来事だと見過ごしてはならないだろう。私たちは、この本を読んで、その答えを探し、これに対する対応策を考えてみなければならない。それだけが歴史の苦い教訓を生かす道である¹⁶。

権謀術数をめぐらせ日本の戦国時代に統一基盤を磨いた織田信長の話が、日本で空前のヒットを飛ばしている点に注目し、当時の日本人が何を考えていたのか、津本陽の作品を読んで知っておくべきと述べている。引用文で言及している「これに対する対応策」は、単に経営や立身出世の問題だけではなく、日韓間の歴史問題を指している。文禄の役(壬辰倭乱)や日本植民地時代などに戻って収奪されることを苦しまないための「対応策」をいう。つまり、日本文学の翻訳は、日本との間で発生した「歴史の苦い教訓」を振り返る役割もするだろうという期待感につながっているのだ。

日本の戦国時代に活躍した英雄を描いた小説で、国内に広く知られているのは、断然として『大望』である。この本は、山岡荘八と吉川英治の作品をあわせて出版したもので、1970年に全32巻で刊行された。『大望』は、これまでいくつかの出版社から重複出版され、現在の市中に出回っている『大望』第2版全36巻は、2005年に出版された。第2版は、1970年の初版とは異なり、山岡荘八の『徳川家康』(1―12)、吉川英治の『新書太閤記』(13―17)、『宮本武蔵』(18―21)、『鳴門秘帖』(22)、司馬遼太郎の『国盗り物語』(23―24)、『竜馬がゆく』(25―27)、『宮本武蔵』(28)、『燃えよ剣』(29)、『翔ぶが如く』(30―33)、『坂

¹⁶ 임종한「역자의 말」(『大夢』1권, 毎日経済新聞社, 1993), p.7.

の上の雲』(34-36)を翻訳し、36巻としてまとめて出版したものだ。このように、国内で最も多く読まれた『大望』も複数の翻訳本が存在し、現在入手できる第2版『大望』は3人の作家の翻訳作品を「大河小説」という形で出版している。

『大望』第2版の内表紙には「完訳名訳『大望』を見る巨匠たちの視点」という文句が書かれており、ここでユ・ジンオ(兪鎮午)、キム・ソウン(金素雲)などの各界の著名人たちの証言が掲載されている。そして、1巻の解説「人間時代 大望時代」を書いたキム・インヨンは「『大望』は、韓国と日本では、すべての分野の指導者レベルの人々と進取的な若者たちに処世と立身の知恵を教えてくれる本として人気を得てきた。」とし、「1970年春には、東西文化史が韓国語版『大望』を出版してすぐ、一瞬のうちに全国の読書界を席卷して、いわゆる『大望の読者層』を形成する驚異的な読書ブームを起こし重版を重ねた。」¹⁷と言及しながら35年が過ぎた2005年にも『大望』は不動のベストセラーだという点を明らかにしている。1970年から2000年代に至るまで『大望』が、日本はもちろん、韓国社会にどの程度大きな波紋を起こしたのかを証言しているのである。さらに第36巻の解説でキム・インヨンは「私たちは日本を知らなければならない。そのために、それらを読む。『大望』は、日本の歴史の重要な事件が集積された人間経営史だと言える。」¹⁸という言葉で『大望』が日本を勉強できる歴史書の性格を持った点をアピールしている。日本を知るための「知日」の本が『大望』というような口調だ。日本にもない「大河小説」出版は1970年に出た『大望』の成功に大きく力を得ている。『大望』は山岡荘八の『徳川家康』の代名詞でもあるが、韓国語訳『大望』には『徳川家康』以外の他の作家の作品も含まれており、日本を総体的に理解する本として流通された。それから『徳川家康』の韓国語訳は、1970年に訳文を皮切りに、1971年キム・ガピョン訳『徳川家康』、1973年ユ・イルグン訳『大野望』、1979年アン・ドンミン訳『大雄』、1982年キム・ソクマン訳『大望』、1984年ナム・ミョンホ訳『徳川家康』、パク・ジュンファン訳『徳川家康』、1985年高麗文化社編集部訳『徳川家康』、1992年シン・ドンウク訳『大望』、1999年イ・ソンヒョン訳『徳川家康の野望』、2000年イ・ギルジン訳『徳川家康』など、タイトルが異なる各種翻訳書として出版された。イ・ギルジン訳の内表紙の最初の章では、「『徳川家康』を正しく読むために」という文句がうたわれていて、その下に「日本の代表的な歴史小説『徳川家康』は水準の高い文学作品であるだけでなく、日本の歴史、文化、社会、伝統生活、精神世界など、日本を総体的に理解するのに優れた道しるべの役割をするはずです。」¹⁹と書かれている。俗に言う「大望」として通用する日本語版『徳川家康』は無分別に大量出版されたが、これは「日本を知る」代用物としても機能していたのだ。

このような「大」の字を明示した、日本大河小説は、企業小説や実録歴史小説などの修飾語をつけて出版を重ね、重複出版という形で国内に散布されたというのが正しいだろう

17 박재희 역『大望』제1권(동서문화사, 2005), pp.21-22.

18 박재희 역『大望』제36권(동서문화사, 2005), pp.23-24.

19 이길진 역『도쿠가와 이에야스 제1부 대망① 출생의 비밀』(2000), 술.

う。「人間経営」や「大望」などのタイトルから垣間見ることができるように、出世志向のある読者にもアピールした傾向もあるが、日本を知るために読まれた本という点も明らかである。その出版形態は、日本の原作とは無関係に「大河小説」というレッテルを張られている。翻訳が必ず、原作と翻訳の一対一の対応関係にのみ存在していないという事実を見せてくれている。国内で「日本」を勉強の対象として消費しながら、日本にも存在しない国内版の日本大河小説が量産された。そして、これらの大河小説から得た「日本を知る」ことは、必ずしも適切だとは見ることができない。日本で司馬遼太郎の歴史小説が「司馬史観」と批判されている側面²⁰などを考慮すれば、いわゆる韓国内で翻訳された、日本の大河小説は作家が描いた歴史話であるだけであって、これを日本理解の代用物としてすぐに信頼してしまったら、日本を誤読する可能性のある素地を残している。

3. 文化交流と村上春樹の後

日本の大河小説が、韓国の日本文学翻訳の席を独占している間、日本では1994年に大江健三郎が日本作家として、二番目のノーベル文学賞を受賞した。その半月後すぐ、韓国内のある日刊紙は「今年ノーベル文学賞受賞、(日)大江健三郎全集出版」という記事を出している²¹。小説20巻、評論講演論集12巻、全32巻の全集構成である。さらにこの企画は高麗苑で全24巻の「大江健三郎小説文学全集」発刊として成功する。韓国内で、日本作家の個人全集と選集は1968年に川端康成がノーベル文学賞を受賞した直後、新丘文化社で発刊した『川端康成全集』全6巻が初であり²²、大江健三郎全集が二番目である²³。1995年から発刊された全集の「編集委員の言葉」を見ると、野心的な抱負がうかがえる。

大江健三郎小説文学全集全24巻を出版する。これは韓国の日本文学の翻訳、さらには外国文学翻訳史上、画期的なこととして記録されるだろう。その理由は、日本作家の作品集として規模の膨大さからしてもそうだし、何よりも現代日本文学の本格的な導入という点からである。(中略)この<大江健三郎小説文学全集>発刊によっ

²⁰ 코모리 요우이치, 이규수역「문학으로서의 역사, 역사로서의 문학」『내셔널 히스토리를 넘어서(ナショナル・ヒストリーを超えて)』삼인, 2000) 参考。

²¹ 『매일경제』, 1994년 10월 30일.

²² この全集はグ・サン(具常)、ファン・スンウォン(黃順元)、アン・스길(安壽吉)、김・돈리(金東里)、한・말스(韓末淑)など当時の作家を編集委員としており、1巻「雪国」ほか3編、2巻「千羽鶴」ほか3編、3巻「伊豆の踊り子」ほか9編、第4巻「女であること」ほか3編、5巻・6巻「東京の人」上下から成っている。

²³ この全集は、1巻中短編集「死者の奢り」、2巻「芽むしり子撃ち・われらの時代」、3巻「遅れてきた青年」、4巻「性的人間・叫び声」、5巻「日常生活の冒険」、6巻「個人的な体験」、7巻「万延元年のフットボール」、8巻「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」、9巻「洪水はわが魂に及び」、10巻「ピンチランナー調書」、11巻「同世代ゲーム」、12巻「レインツリーを聴く女たち」、13巻、「新しい人よ眼ざめよ」、14巻「河馬に嘲まれる」、15巻「M / Tと森のフシギの物語」、16巻「懐かしい年への手紙」、17巻「キルプの軍団」、18巻「人生の親戚」、19巻「静かな生活」、20巻「治療搭・治療塔惑星」、21巻「燃えあがる緑の木第1部」、22巻「燃えあがる緑の木第2部」、23巻「燃えあがる緑の木第3部」、24巻「大江健三郎論」で構成されているが、出版社の事情で、このうち6-8、10-12、14-17、19-23冊だけ出版された。

て日本文学の紹介と研究がさらに活性化され、日韓の間で純粋な文化交流が増え、二国間の相互理解のために力になると信じている²⁴。

ここから読み取れるのは、大江健三郎全集が「現代日本文学の本格的な紹介」と「日韓間の純粋文化交流」の活性化を促進させるきっかけになることを望んでいるという点である。1995年以前にも日本文学の翻訳はあったが、1960年代の日本文学全集と選集を除いて、1970年代と80年代には、主に企業、歴史小説のような大河小説が日本文学翻訳の主な地位を占めていた。したがって、「本格的な紹介」という言葉は、大河小説のような大衆小説ではない純粋文学作品の紹介を意味する。1960年代の全集と選集の翻訳は、近代と戦後の文学を広く含んでいたが、それ以来、「現代」の文学作品の紹介は続かなかった。後述する村上春樹も、1995年以前から翻訳されていたが、この「本格的な紹介」とは別であった。ここでは、大江健三郎のような作家たちの作品が「韓日間純粋文化交流」に貢献することができ、「両国の相互理解の力になる」という自信が前提されている。また、大江健三郎全集が発刊された同じ年に「現代日本文学の本格的な紹介」が、他の出版社から企画された点も注目できる。これは、ウンジン出版から出版された「20世紀日文学の発見」シリーズである²⁵が選集の責任編集者であるパク・ユハは次のように述べている。

音楽や美術分野はもちろん、文学に関しても、私たちはこれらの精神的支えとなっている作家や作品を知らずにいます。それもそのはず、これまで私たちに紹介されてきた日本文学とは、世界文学全集の中で、1冊や2冊挟まっている程度に過ぎなかったからです。そのほかには、大衆文学や日本でベストセラーになった作品だけが、商業性を狙った出版社によって無分別に出版されているのが現実で、私たちの日本観は歪曲されるしかなかったと言えます。(中略)また、それらを「知る」ことが私たちの課題だとすると、文学は、その最も基本的な資料となります²⁶。

このような言及は、大江健三郎全集の「編集委員の言葉」と特に変わらない。しかし、1995年を起点として日本文学翻訳に新しい様相が見られる。1970年と1980年代の大衆小説の大量の翻訳や消費が、このような純粋文学の紹介を促したのだ。1996年1月には「日本近代文学を代表する作家13人が韓国の読者のために、自ら厳選した優秀短編小説」というキャッチコピーを裏表紙に刻んだ「現代日本文学代表作家の自選集」『ツバメの巣がある家の侵入者』が発刊されている。収録作家13人のうち8人が芥川受賞作家であり、

24 오에 겐자부로, 신인섭 옮김『동시대 게임』오에 겐자부로 소설문학 전집⑩(고려원, 1997).

25 このシリーズは、夏目漱石『夢十夜・心』、芥川龍之介『或阿呆の一生』、宮沢賢治『春と修羅』、川端康成『山の音』、太宰治『人間失格』、坂口安吾『桜の森の満開の下』、大岡昇平『俘虜記』、三島由紀夫『金閣寺』、大江健三郎『人生の親戚』、高橋源一郎『優雅で感傷的な日本野球』、村上龍『五分後の世界』、山田詠美『風葬の教室』で構成されている。

26 박유하「『20세기 日文學의 발견』을 내면서」(다카하시 겐이치로, 박혜성 옮김『우아하고 감성적인 일본야구』웅진출판, 1995), pp.214-215.

5人も、各種の文学賞受賞者で構成された作品集である²⁷。この翻訳選集の解説「日本小説の新しい動向―韓国読者みなさんに」という文では、日本の詩人でもあり、文芸評論家である荒川洋治は、「この選集に収録された作品を通し、現代の日本の言語表現の実状と問題点が、韓国の読者の皆さんにある程度、認識されるだろうと信じている。この選集の出版が相互間の文学に出会うための第一歩となることを願っている。」²⁸と書いている。文学作品の翻訳は、日本の理解と文化交流の場に一定の役割を担うものと認識されているのだ。この傾向は、1997年から出版され始めた「翰林新書日本現代文学代表作選」シリーズでもよく表れている。この企画物は、2003年までに全40巻が出版された²⁹。その出版趣旨は次のように提示されている。

日本文学は、すでに世界文学史で確固たる地位を固めている。日本は伝統的に、文学の中に思想を込めてきた。そのため、日本社会を知るためには、日本文学を知らなければならないと言われている。それにもかかわらず、これまでの商業性を主とした一般的な出版事業では、日本文学の全貌を知るには、困難な事情が多かったのが事実だ。そのため、本研究所は、日本を正しく理解するために、また、日韓間の文化交流を一層促進するために、日本現代文学の代表作選を出版することにした。このような努力が、私たちの文化発展に大きく貢献することができることを願い、また、日本でも韓国文化を知らせるための努力が起き、日韓間の新たな世紀が明るく展望できることを望む³⁰。

ここでも確認できるのは、日本を知るための一環として、日本文学の翻訳が行われたという事実であり、また、文学の翻訳が「文化交流」の次元で重要な役割を果たすことができるという認識である。しかし「日本を知る」という名目は、ある程度達成することができるといっても「日韓文化交流」促進に文学翻訳がどの程度貢献することができるのかは疑問である。なぜなら日韓間の文学翻訳の不均衡は深刻であるからだ。これを物語っているのが、2008年から2010年の3年間、韓国での日本文学の翻訳が2,555種であるのに対し、同じ期間に、日本で翻訳された韓国文学はわずか58種類にとどまった³¹という事実だ。また、果たして「日本理解」という側面が文学翻訳においてどのくらい作用するかも考えざるを得ない。植民地支配解放後から2009年までの64年間、韓国内で、最も

27 収録作品は、青野聡「ツバメの巣がある家の侵入者」、津島祐子「ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語」、金井美恵子「調理場演劇」、高橋三千綱「雷魚」、増田みず子「幼い神」、南木圭士「ダイヤモンドダスト」、藤原智美「灰色のバス」、笹野頼子「背中穴」、保坂和志「夢を見た後」、吉目木晴彦「古屋で」、辻仁成「オープンハウス」、多和田葉子「光とゼラチンのライブチヒ」、中村和恵「E」である。

28 아오노 소오 외, 권택명 역『제비둥지가 있는 집의 침입자』일본 현대문학 대표작가 선집자(신구미디어, 1996), p.13.

29 この選集の収録作品については、図書出版小花のホームページで確認することができる。

30 이부세 마스지, 김춘일 역『검은비』한림신서 일본 현대문학 대표작선㉔(小花, 1999).

31 舘野哲, 「なぜ韓国で日本の小説はよく読まれるのか―日韓の出版事情を比較する」 <http://www.wochikochi.jp/special/2011/05/tateno.php> (2014年5月23日検索)。

多く作品が翻訳された作家は三浦綾子で、134編の作品が307回に渡って翻訳された。続いて村上春樹の作品は、106編が259回翻訳された³²。しかし、この二人の作家の作品が韓国語に翻訳され、「日本を知る」と「文化交流」の役割をコンスタントに実行していたのかと問われれば、これには疑問が生じる。三浦綾子や村上春樹の作品は、「日本」という文字とは無関係に、韓国内で消費される傾向があるからである。二人の作家が、韓国で大量に消費される現象は、対等な交流ではなく、文化交流の不均衡をもたらす要因でも作用する。

三浦綾子に比べて生存する作家である村上春樹は、2009年以降も着実に翻訳されている。新作が出るたびに、ほぼ開きのない時差で翻訳されているのはもちろん、これまで翻訳されなかったエッセイをはじめ、ほぼすべての作品が翻訳されたと言っても過言ではない。また、彼の存在が韓国文学界に及ぼした影響も少なくない。村上春樹は、1987年に日本で出版された『ノルウェイの森』全2巻が1988年に『ノルウェイの森』全2巻(ノ・ビョンシク訳)で翻訳され、韓国で初めて広く知られた作家である。翌年1989年には『ノルウェイの森』のもう一つの韓国語訳『喪失の時代』(ユ・ユジョン訳)が文学思想社で出版されたが、この本は、現在までに4版まで出版され、確固たるベストセラーとして位置している。さらにこの本は、韓国の著名な評論家から「特異なわいせつ集」と卑下されることもあり³³、1980年代以降に登場した、韓国の新世代の作家たちに大きな影響を与えた。村上春樹の翻訳作品は、韓国文学界で盗作のようなスキャンダルを起こした³⁴。最新作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の翻訳印税が16億ウォンにまで迫るなど村上春樹自体が韓国でいつも話題を生んでいる。近年ではノーベル文学賞に最も接近した文学者とされ、注目を集めているだけではなく、日本の生存している作家としては、ノーベル文学賞受賞者である大江健三郎、沖縄の作家である目取真俊と共に村上春樹は『ノルウェイの森』が韓国の「世界文学全集」(民音社)に収録された作家でもある³⁵。

しかし、今や日本文学の翻訳を考えると、村上春樹の絶大な影響だけが問題ではない。2000年代に韓国内で最も多く翻訳された作家は村上春樹ではなく、東野圭吾である。1999年に『秘密』という翻訳作品で、韓国に初登場した東野圭吾は、2009年には11冊、2010年には13冊の作品が翻訳出版され、韓国で最も多くの作品が翻訳されている日

32 『氷点』をはじめ、三浦綾子の作品が多数翻訳された点についてカンウ・ウォンヨンは、「人間なら誰しも共感することができる感性的な手段として、宗教と人間性に対する省察」が作品に内在しているからだといひ、「さらに隣人や兄弟が互いに殺し合う戦争を経験した「戦後世代」に悲惨だった過去の罪を洗い流し、新しい生活を営むことの名分が必要だった。キリスト教は、そのような意味で、韓国社会に一種の「貢献」をし、「氷点ブーム」も同じ脈絡で解釈することができる。」と述べている(ユン・サンイン他(2008), 先の本, p.68)。

33 유종호「과거라는 이름의 외국」(『현대문학』, 2011), p.113.

34 文学評論家 イ・サンウクが、イ・インファの小説『내가 누구인지 말할 수 있는 자는 누구인가』に対して村上春樹作品の盗作だと主張したことからはじまった論争。이성욱『비평의 길』(문학동네, 2004) 参考。

35 大江健三郎の『個人的な体験』は「ウルユ世界文学全集」に収録されており『美しいアナベル・リイ』は、目取真俊の『水滴』と共に「文学トンネ世界文学全集」に収録されている。

本作家として知られた。2011年に6冊、2012年と2013年にはそれぞれ4冊の翻訳本が出版されたが、2014年6月現在、すでに7冊の東野圭吾の作品が出版されている。彼の作品は、すべて長編小説であるが、現在50冊を上回る作品が翻訳された状態である。2014年6月29日『聯合ニュース』の「東野圭吾、国内で村上春樹の人気を越えることができるか」という記事は、次のような興味深い事実を述べている。

29日教保文庫によると、今年の村上春樹小説の販売量に対する東野圭吾小説の販売率は156.1%である。つまり、村上春樹の小説1冊が売れるたびに東野圭吾は1.6冊が売れた格好だ。これは東野圭吾が多産の作家であることに加え、映画化などを通じ、韓国国内でも着実に認知度を高めたことによるものと分析される。村上春樹に対する東野圭吾小説の販売率は2005年には1.5%に過ぎなかったが、2008年に101.4%と対等な位置についたこと続き、2009年に62.2%、2010年45.6%、2011年71.6%、2012年79.7%などで着実に村上春樹と肩を並べてきた³⁶。

この記事は、東野圭吾の小説が2014年6月現在、日本の翻訳小説の中で占める占有率が16.5%で、11冊が翻訳された2009年の14.3%を超えて最高値を記録していると伝えている。東野圭吾のような推理作家の翻訳書は、最近、日本文学翻訳において大きな比重を占めている。次の「日本推理ホラー小説に席を譲る」という記事がその事実を伝えている。

教保文庫の2003年から2013年までのホラー・推理小説ベストセラー集計によると、昨年、各国の出版物販売の割合で1位と2位を占めたのは、日本と英米の小説で、それぞれ43.96%、37.01%で、事実上独占的地位に至った。これに比べて、韓国小説の割合は5.09%で、10.01%であるドイツと北欧小説にも劣る4位に終わった。韓国小説の割合は、2003年に13.03%、2009年に3.77%に急減した後、2010年に9.64%に、ぐっと割合を上げたが、以後ずっと5%台の落ち込んだ数値を見せている。一方、2003年6.0%にとどまっていた日本小説の割合は、2009年49.98で過半数に迫る成長を見せた後、継続して韓国市場での販売比率1位の座を守っている³⁷。

2003年の村上春樹が国内で広く読まれる時期に、日本の推理・ホラー小説はあまり受け入れられなかった。しかし、現在では江戸川乱歩、横溝正史、宮部みゆき、松本清張など、日本の主要な推理小説作家が韓国内で人気を集めている。日本で宮部みゆき編集に出てきた『松本清張傑作短編コレクション』全3巻が2009年翻訳され「松本ワールド」、「松本清張の長編ミステリー」シリーズも相次いで出版され、多数の松本清張作品が韓国に紹介されている。また、宮部みゆきの推理小説も江戸時代を背景に繰り広げられる時代ミステリーシリーズ「宮部ワールド第2幕」を含む主要作品がほとんど翻訳されている。

³⁶ 이한정「일본소설의 한국어 번역 현황과 특성—2006년 이후를 중심으로—」(『일본어문학』vol.51, 일본어문학회, 2010), pp.339-340.

³⁷ <http://www.yonhapnews.co.kr/>(2014年7月23日検索).

2008年には『江戸川乱歩全短編集』全3巻が翻訳され、横溝正史の推理小説も続々と翻訳された。これにライトノベルまで視野におくと、日本文学は、翻訳を介して韓国に広く流入されている³⁸。しかし、三浦綾子、村上春樹、推理小説、ライトノベルなどが「日本を知る」ことや「文化交流」の次元で翻訳される日本文学作品ではないという事実は、注目する必要がある。

一方では、推理小説やライトノベルの拡散する一途の中でも、日本文学史に登場する、純粋文学の翻訳紹介も作家全集や作品選集の形で継続的に行われており、2005年以降には、古典文学にまで至り、その紹介の幅がかなり広がっている。『宮沢賢治全集』は全3巻構成で、2012と2013年にそれぞれ1巻と2巻が出版された。『太宰治全集』は全10巻が出版される予定で、現在までに『晩年』、『愛と美について』、『ユダの告白』、『新ハムレット』、『パンドラの匣』、『正義と微笑』、『津軽』など計7巻が翻訳された。2016年、夏目漱石死後100年を記念して、2013年から出版している『夏目漱石小説全集』全10巻も注目に値する。ここに含まれている夏目漱石の作品は、すべて既に翻訳された作品(予定)である。それにもかかわらず、このような企画が行われるのは、夏目漱石が、日本近代作家として韓国で新たに光が当てられていることから来ているだろう。現在、この全集は『吾輩は猫である』、『坊っちゃん』、『草枕』、『台風』の4巻が出版された。日本文学の研究者が中心となった全集の翻訳もある。それは、全10巻で出版予定の『芥川龍之介全集』で、現在5巻まで出版されている。全2巻の『小林多喜二全集』も1巻が2012年、2巻が2014年に出版された。

いわゆる文学史で取り上げられている「純粋文学」作品の翻訳は、近現代の文学作品だけでなく、古典文学の翻訳も活発である。まず、詩作品を見ると、2012年からイ・ヨンスク訳で『韓国語訳万葉集』が全20巻として刊行中で、日本初の漢詩集『懷風藻』もコ・ヨンファンの翻訳で2010年に完訳され、グ・ジョンホによって『古今和歌集』全2巻で、2010年に翻訳された。また、2008年にはイム・チャンスによって『百人一首』が翻訳された。俳句は、1998年に民音社から出ている世界詩人選の1巻としてユ・オクヒ訳『松尾芭蕉の俳句』が出版されて以来、2006年にはオ・ソクユン訳『日本の俳句選集』が出版され、2008年には与謝蕪村と小林一茶の俳句がチュ・チュンヒ訳で、それぞれ『春夏秋冬』と『夜に咲いた桜』というタイトルで出版された。この他にもいくつかの俳句翻訳版が存在し、特に2000年には詩人リュ・シファの俳句コレクション『一行でもとても長い』が出版されて、広く読まれている。古典文学の主要な散文の翻訳作品は以下の通りである。

38 이한정「일본소설의 한국어 번역 현황과 특성-2006년 이후를 중심으로-」(『일본어문학』vol.51, 일본어문학회, 2010), pp.339-340.

表1. 日本古典文学の主要散文翻訳作品

原作名	翻訳書名	翻訳者名	出版年度
古事記	日本神話古事記	バク・チャンギ	2006
	古事記	グオン・オヨブ、グオン・ジョン	2007
	古事記	ノ・ソンファン	2009
風土記	風土記(抄譯)	カン・ヨンジャ	2008
日本靈異記	日本靈異記	ジョン・チョング	2011
伊勢物語	伊勢物語	グ・ジョンホ	2012
源氏物語	源氏物語	キム・ナンジュ	2007
落窪物語	落窪物語	バク・ヨンジョン 他	2010
堤中納言物語	堤中納言物語	ユ・インスク 他	2008
土佐日記	紀貫之散文集	カン・ヨンジャ	2010
蜻蛉日記	蜻蛉日記	ジョン・スンブン	2009
枕草子	枕草子	ジョン・スンブン	2004
平家物語	平家物語	オ・チャヌク	2006
沙石集	砂と石	ジョン・チョング	2008
方丈記	方丈記	チョ・ギホ	2004
徒然草	徒然草	キム・チュンヨン、オム・インギョン	2010
御伽草子	御伽草子集	イ・ヨンミ	2010
紫式部日記	紫式部日記	ジョン・スンブン	2011
和泉式部日記	和泉式部日記	ノ・ソンスク	2014
更級日記	更級日記	ジョン・スンブン、キム・ヒョスク	2012
讃岐典侍日記	讃岐典侍日記	ジョン・スンブン	2013
御伽婢子	御伽婢子	イ・ヨンミ	2013
好色一代男	好色一代男	ソン・ジョンソブ	1998
日本永代蔵	日本永代蔵	ジョン・ヒョン	2009
雨月物語	雨月物語	イ・ハンチャン	2008
春雨物語	春雨物語	チョ・ヨンリョル	2009
曾根崎心中	曾根崎森の情事	チェ・グァン	2007
仮名手本忠臣蔵	47人の侍	チェ・グァン	2007
奥の細道	芭蕉の俳句紀行	キム・ジョンレ	2008
東海道中膝栗毛	十返舎一九作品選	カン・ジヒョン	2010
春色梅児誉美	春色梅児誉美	チェ・グァン	2009

〈表1〉から分かるように、日本の古典文学史で扱われる物語、日記文学、エッセイ、紀行文、近世の滑稽本と人情本などに至るまで、主要古典散文は、現在、ほとんど韓国語で読むことができる。『好色一代男』を除いては、古典文学翻訳版がすべて2005年以降に出版された点が特徴である。もちろん1973年ユ・ジョン訳の『源氏物語』、1975年ソン・スクギョン訳の『徒然草』、1987年ノ・ソンファン訳の『古事記』など、日本古典文学の翻

訳が以前にもあったが、このような時期に集中的に翻訳されたことは、2005年以降が初めてだ。翻訳者がほとんど現役日本文学研究者だということも特記すべき点である。古典文学では、研究者が、翻訳者も並行している³⁹。

村上春樹が紹介されて以来、日本文学の翻訳が、韓国文化に与えた影響は少なくない。村上春樹の作品や推理小説、ライトノベルなどは「日本を知る」ことや「文化交流」とは距離がある地点で大量に翻訳された。しかし、この翻訳は、「日本」という商標とは全く関係がないわけではない。2005年以降の日本近代作家の個別全集や古典文学作品の翻訳が盛況を成す現象は、何であろうとも「日本」で出版された文学作品の翻訳に慣れている読者の、幅広い需要が伴うからである。また、近年の夏目漱石全集や『源氏物語』の翻訳は必ずしも日本理解や文化交流の名目による作業ではないだろう。過去のように、純粋文学や大衆文学などの区別なく、現在の日本文学翻訳が古典文学までもを含め、全範囲に至っている現象をどのように見るべきか、またこれらの翻訳作品の評価はどのように行われるべきか、日本文学研究者が傍観できない事態が目前に広がるだろう。

4. 日本文学の翻訳の評価と研究

以上で全集と選集の翻訳、大河小説と村上春樹の翻訳、また最近浮上している推理小説、古典文学の翻訳について概観した。1960年代以降から、日本文学の翻訳は、韓国の読書界において中心的な位置にあり、また近年の10年は、さらに頭角を表し、日本文学の翻訳が好況を謳歌している。次からは、国内で出版された膨大な分量の日本文学翻訳の評価と研究はどのように行われているか考えてみよう。

韓国語に翻訳された外国文学作品翻訳の評価と研究が注目を受けるようになったのは、2002年から英米文学研究会で英米古典翻訳評価事業を行い、2005年と2007年に全2巻で『英米名作、良い翻訳を探して』を出版した後である。この作業に続いて、2008年には高麗大学校フランス語フランス文学科が「フランスの名作小説の翻訳評価：翻訳DB構築、翻訳品質評価、翻訳辞書編纂」事業を開始し、あわせて韓国翻訳批評学会が創立され、『翻訳批評』という学術誌を、現在の5号に至るまで発刊している。また、『教授新聞』も2006年と2007年にかけて『最高の古典翻訳を探して』全2巻を刊行し、古典として見なされている作品の翻訳実態を確認、批判的翻訳文化を模索した。この本で、日本の文学作品は、川端康成の『雪国』と夏目漱石の『心』の訳が取り上げられた。2005年4月号文芸誌『文学思想』は植民地返還60周年特集として「韓国の外国文学受容様相－日本編」を掲載した

³⁹ 2005年以降の、日本古典文学翻訳の集中現象についてチェ・グァン(2012)は、日本の古典文学の翻訳が「1990年代から自然にその分野の専門家による翻訳に変わる。難解な古典作品を原文に基づいて忠実に翻訳しなければならない」という社会的ニーズと相まって、日本で、古典分野を正式に勉強した世代が、翻訳作業に飛び込むようになったことを意味する。これらの古典翻訳出版が盛んに行われた時期は、留学2世代が帰国して、完全に定着した21世紀に入ってからだ。」と述べている(『한국에서 일본고전문학연구 동향－2005년~2011년을 중심으로』『일어일문학연구』제83집, 한국일어일문학회, 2012, p.74)。

が、ここでキム・ウンギョが三浦綾子の『氷点』訳文を「日本文学の翻訳の歪曲像」⁴⁰ という文で文学翻訳の評価を試みた後、2007年にはチェ・ジェ Chol의「村上春樹文学と韓国：テキストと翻訳受容」(『日本研究』vol.34)が発表され、翻訳の評価と研究が本格的に行われた。単行本では、『最高の古典翻訳を探して』に収録された文章が初の日本文学翻訳評価であったとすることができる。

そして前述した『日本文学の翻訳、60年の現状と展望』が2008年に出版された。この本は、日本文学の翻訳作品の書誌リストが含まれ「韓国人にとって日本文学は何か」、「何が翻訳されたか」、「どのように読んだか」、「どのように翻訳されたのか」という論文を載せている。日本文学翻訳を「現状」「受容」「実態」の観点から分析している。この研究の後続として、日本文学の翻訳の現状と受容に関する研究が続いた。ムン・ヨンジュの「日本小説の国内翻訳出版の現状と特性の通時的考察」(『韓国出版学研究』vol.54, 2008)、パク・ジョンジンの「韓国における宮沢賢治作品の受容：翻訳を介してみる賢治」(『童話と翻訳』vol.16, 2008)、イ・ソニの「日本文学の「翻訳」から見える歴史認識の考察－歴史小説『徳川家康』を中心に」(『アジア文化研究』vol.18, 2010)、カンウ・ウォンヨン「1960年代の日本文学の翻訳と韓国－「好奇心」と「郷愁」をめぐる読者の風俗－」(『日本学報』vol.93, 2012)と「1960年代初期のベストセラーを通して見る日本小説の翻訳と韓国読者：原田康子、石坂洋次郎、パク・ギョンリを中心に」(『日本学報』vol.97, 2013)などを挙げるることができる。

そして翻訳実態に関する研究は、主に原文との対照を通じた日韓間の言語表現と文化の違い、特徴に注視しながら、「忠実性」と「可読性」の実現、あるいは「誤訳と誤謬」の問題、「直訳」など、日本語の文章を韓国語として移すときに発生する、言語表現と文化の特徴を原文との対照を介して察している⁴¹。これらの研究方法は、2010年と2011年にそれぞれ単行本として出版されたオ・ギョンスの『翻訳調文体の誘惑』とユ・ウンギョン

40 この特集では、キム・ウンギョの文章以外にもホン・ジョンソン「共感と拒否の日本文学受容史」、パク・グアンヒョン「境界を越えた和解の時代」、ジャン・ソクジュ「世界性を獲得した春樹の「無国籍性」の文学」が掲載された。

41 김정례「일본 문학작품의 한국어 번역 상의 문제점 가나와 고유명사의 한글 표기를 중심으로」(『日本語文学』vol.1, 1995)、황경자「日本文学作品의 한국어 번역에 따른 諸問題 요시모토 바나나의 作品을 중심으로」(『번역학연구』vol.1, 2000)、호사카 유지「일본 현대소설의 오역사례」(『번역학연구』vol.2, 2001)、「일본 대중소설에 대한 직역과 의역 및 개작에 관한 소고」(『번역학연구』vol.4, 2003)、「日本近代小説の韓国語 翻譯本考察」(『일본학보』vol.58, 2004)、김정경「일한문학번역의 독자지향적 경향 연구－『도련님』번역본을 중심으로－」(『일어일문학』vol.35, 2007)、유은경「오역의 양상과 오역방지를 위한 제안 번역본－『도련님』 1~2장을 중심으로－」(『일본어문학』vol.42, 2008)、이한정「번역된 텍스트의 이질적 공간 나쓰메 소세키 『도련님』의 한국어역에 대하여」(『일본어교육』vol.50, 2009)、김종덕「한국에서의 『젠지 이야기』번역에 관한 연구」(『통번역학연구』vol.12, 2009)、이예안「일한문학번역작품의 고유명사 번역에 대한 연구：이야자와 겐지의 『은하철도의 밤』을 중심으로」(『일본근대학연구』vol.29, 2009)、최재철·정인영「일본현대소설의 한국어 번역 고찰－무라카미 하루키(村上春樹) 『세계의 끝과 하드보일드 원더랜드』의 번역본 대조를 통하여－」(『일어일문학연구』vol.58, 2011)、정인영「일본현대소설의 문화관련 어휘 번역 小考－村上春樹『ノルウオイの森』의 번역텍스트 비교」(『일본문화학보』vol.50, 2011)と「일·한 소설번역에서 문체번역의 문제 무라카미 하루키(村上春樹) 『양을 둘러싼 모험(羊をめぐる冒険)』을 중심으로－」(『일본연구』vol.52, 2013)、박경화「헤이안(平安) 문학의 한국어역에 대하여」(『일본어학연구』vol.35, 2012)、윤호숙「일본문화의 한국어 번역 양상－일한번역소설 및 한국인 일본어학습자의 일한번역을 중심으로」(『일본어교육연구』vol.28, 2014) など。

の『小説翻訳こうしよう』でもよく現れている。

『翻訳調文体の誘惑』は「日本語が韓国語を侵食した?」という副題が示すように、日本文学作品の翻訳のみを対象とせず、韓国の日本翻訳の断片的な文章を事例として、日本語の文章を韓国語として移すときに表示される日本語っぽい表現を考察している。そして新聞記事や文学作品など、その日本語っぽい表現、すなわち「翻訳調文体」がどのくらい広範囲で表れるのか詳しく考察している。この本において「翻訳調文体」は、「翻訳者が原文の内容を正確に理解していなかったり、韓国語能力が不足していたりするために表れる。したがって、自然で美しい韓国語翻訳のためには韓国語表現能力が前提とされることはもちろん、翻訳者は翻訳のしかたの問題を事前に十分に認識し、なるべく減らしていくように努力しなければならない。」⁴²と述べている。『小説翻訳こうしよう』は表紙に書かれた「『坊っちゃん』の正しい鑑賞と日本の小説の翻訳の技術」という、フレーズからわかるように、2000年以降に韓国内で出版された夏目漱石『坊っちゃん』の韓国語訳のいくつかを検討している。既存の翻訳本にある「細かいエラー」を指摘し、日本文学をどのように翻訳すればいいか、その翻訳「技術」を説明している。この本が考察している部分は、『坊っちゃん』全11章のうち、4章までだけである。日本文学の翻訳研究書としては、先の『日本文学の翻訳、60年の現状と分析』以外の唯一の日本文学翻訳の評価および研究成果とすることができるこの本は、既存の翻訳の「問題」を原文と翻訳文の対照に重点を置いている方で、実際に著者もいくつかの作品を翻訳している。その一方で、他の翻訳の誤謬と誤訳を中心に問題視するのは、どのような趣旨であろうか。

この本の構成上、筆者は、既存の翻訳書の誤りや誤訳を多く指摘したが、それは翻訳者の実力不足や、資料の検索を怠ったためでもあるだろう。また、外国人としての限界に突き当たる場合もあり、劣悪な翻訳環境からもたらされたということも少なからずある。(中略)この本を通して分かるように、韓国の日本小説の翻訳レベルがあまりよくないという点である。(中略)一度くらいは、翻訳に対する興味を呼び起こし、翻訳のレベルをアップグレードさせるきっかけを用意する必要がある。どの翻訳書を読むかによって、日本文学に関する韓国読者の認識が違ってくる。この本は、日本小説翻訳の認識を新たに植えつけ、素晴らしい翻訳書が量産されるきっかけになったらと思うところだ⁴³。

既存の翻訳書を検討し、翻訳の「誤りや誤訳」を指摘するのは、翻訳の評価や研究の一次的な作業だ。しかし、これがどれだけ至難の業であるかということは、前述した英米古典評価事業を主導し、韓国文学翻訳院長として韓国文学の英語圏の翻訳の翻訳評価事業を推進したユン・ジグァン教授も述べている。したがって、翻訳の評価で重要なのは提示されている「基準」である。よく「原文をどれだけ正確に理解し、適切に翻訳したかと

⁴² 오경순『번역투의 유혹』(이학사, 2010), p.33.

⁴³ 유은경『소설 번역 이렇게 하자』(향연, 2011), pp.7-8.

いう」「忠実性」と「翻訳が韓国語でどれだけうまく駆使されているかという」「可読性」がその「基準」となる。しかし、「翻訳という活動自体が翻訳者に絶え間なく選択と判断を要求し、これにはどんな法則にも包括されていない、印象や感覚の次元が介入」するので「翻訳評価が学問として確立されるためには避けられない」かもしれないが、翻訳の評価の「体系化」もやはり簡単でないことは事実である⁴⁴。そのため、最近の韓国での文学翻訳の評価や研究では「文学翻訳評価から文学翻訳批評に」転換されることが議論になっている。「文学翻訳評価では、文学性が評価の中心にならなければならない」という「翻訳批評」が最近の文学翻訳の評価と研究の争点である⁴⁵。このように詳しく見てみると、日本文学翻訳の評価と研究は、まだ「誤りや誤訳」に対する事例の指摘にとどまっていて、それが翻訳作品を読むことにどのように関連しているのかは考察していない。

翻訳物の「誤訳」は、すでに1993年から国立国語研究院でも実施されていたが、この報告書の「はじめに」では、「間違った翻訳で、読者の文化的、知的欲求を満足させられないことはもちろんのこと、外国文化に対する歪曲された視点を助長する恐れまである。また、翻訳書は、韓国語の言語規範に合致していない点が多く、翻訳への関心が高まることは、国民の正しい国語生活を営むという次元でも、必ず通過しなければならない課題であること」と記述している⁴⁶。「誤りと誤訳」の指摘は「外国文化に対する歪曲された視点」の矯正や「正しい国語生活を営む次元」で語られている。先に引用した『小説翻訳こうしよう』の序文で述べた論調とほぼ変わらない。翻訳の「誤りや誤訳」の指摘は当然行われるべきである。しかし、「誤りや誤訳」の指摘は、翻訳評価の第一歩であるだけであって、翻訳評価や研究の外縁に拡張するまでには至らない。そうなると、翻訳評価や研究が「外国語/外国文化」に対する「国語/韓国文化」という境界を確実にする役割をはたす恐れがある。韓国内の文学翻訳の評価と研究は、近年高まってきている。英米文学界とフランス文学界の文学翻訳評価事業はもちろんのこと、韓国文学翻訳院と韓国古典翻訳院の事業など、文学と古典翻訳をめぐる議論が活発である⁴⁷。日本文学翻訳の評価と研究もこのような流れの中で、新しい糸口を見出さなければならないだろう。その方向性を次のように考えて見る。

第一に、翻訳は言語の移動であるということである。したがって、日本語の原文と

44 윤지관「문학번역 평가 누가 어떻게 할 것인가?」(이창수·임항욱 편저『동번역학 연구 현황과 향후전망』II, 한국문화사, 2013), pp.342-355. 韓国文学翻訳院は、2007年に『문학번역 평가 시스템 연구』という研究書を出している。また、조성원「번역평가 기준으로서의 '충실성'과 '가독성'에 대하여 영미문학연구회 번역평가 사업에 대한 소고」(『안과밖』vol.23, 2007)は英米名作翻訳評価事業の問題点をひとつひとつ指摘している。悪質翻訳を選ぶ評価に重点を置き、文学性の再現可否に関する評価が保留されている点を指摘し、翻訳実績評価を基に、翻訳批評まで拡大したいという目標で「フランスの名作小説の翻訳評価研究チーム」が発足した。

45 정혜용『번역 논쟁』(열린책들, 2012), p.137.

46 국립국어연구원『번역 출판물의 오역에 관한 기초적 연구 조사 보고서』(1993), p.1.

47 韓国文学翻訳院の事業は、2011年に出版された『한국문학번역원 10년사』, 韓国古典翻訳院の事業は、2010年から発行されている『고전번역원감』で確認することができる。これらの翻訳院の事業は、主に翻訳の実行と、現状の把握、評価に集中しているが、国内の翻訳の評価と研究の一面を垣間見ることができる。

翻訳文の対照に関する評価は、その出発点となる。これまでの日本文学の翻訳研究も、ほとんどこのような観点から行われてきた。翻訳作品を、原文と照らし合わせながら「誤りと誤訳」を把握するには、評価指標や基準がなければならない。しかし、これまでの日本文学の翻訳研究では、このような議論が行われてこなかった。研究者各自の、恣意的で主観的な評価に依存していただけである。したがって、原文と翻訳文の対照は翻訳状態の把握に留まり、どのような翻訳作品が果たして良い翻訳なのかを論じた質的評価と、翻訳批評研究は、未だ正しく行なわれていない。日本文学翻訳の評価のために、一定の評価指標が設けられ、日本文学界で共感される必要がある。英米学界や仏文学界で実施された内容を参考にすることもできるが、日本語と韓国語の関係、日本文化と韓国文化の関係を十分に考慮した評価方法が求められる。また、詩と散文作品、古典文学と現代文学、大衆小説、ジャンル文学など、それぞれの文学作品の性格を念頭に置いた、統一的な基準を視野に入れるべきである。これによって、日本文学翻訳の良質な翻訳事例を提示することができ、また、このような事例が蓄積されることで、日本文学翻訳の研究が、韓国内の日本文学読者に、質のよい翻訳本を選択できる資料として提供されるはずだ。そして、翻訳の評価に関する研究では、作家の文体と作品性も十分に生かされているかも検討しなければならない⁴⁸。文学作品の翻訳という点に留意し、作家特有の文体も考慮する必要がある、一人の作家の文体が翻訳者によって異なったり、一人の翻訳者の翻訳文体の中で変わって、固定されてしまう現象も研究視野に入れるべきである。

第二に、翻訳は言語の移動ではあるが、先に見たように、「日本理解」や「文化交流」の手段としても作用する。そのため、外国の文化受容の側面から見なければならない。その意味で、翻訳された日本文学の翻訳出版物の現状を通し、時代別の読者の受容と、社会像を観察しようとする研究が必要である⁴⁹。さらに、文学作品を翻訳するために、どのような作品が選ばれているのか、ということと、翻訳者の役割や、編集者の関与など、翻訳出版物を取り巻く環境も研究対象にいなければならない。言語の移動は、真空状態では行なわれない、ということを認知し、翻訳周辺の状況も含まなければならない。日本文学の翻訳が、韓国の文化圏に与える影響は、今後、多角的な側面から積極的に究明される必要がある。そして、このような影響を与える関係は、必ずしも否定的なものではない。文学翻訳が自国文化を豊かにするのに役に立った事例は、近代日本だけでなく、様々な文化圏で確認されるためである。

第三に、日本文学を「他者」として観察できる視野が、翻訳研究に反映されるべきである。日本文学の翻訳は、韓国内で無差別に消費されている。最近では「韓流」と対立する

48 これに関する研究としては、성혜경의 「무라카미 하루키의 「하나레이 만(ハナレイ・ベイ)론: 한국어 번역을 중심으로」(『외국문학연구』vol.37, 한국외국어대학교외국문학연구소, 2010)의論考が参考になる。翻訳を通して作家特有の文体、作品性を研究した事例である。

49 前述したカンウ・ウォンヨン(2012, 2013)の研究や、李漢正「미우라 아야코 『빙점』의 한국어 번역과 '재번역」(『비교문학』vol.58, 2012)と「『노르웨이의 숲』의 번역과 문화적 교차」(『일본학보』vol.96, 2013)が、これらの研究の試みといえることができる。

言葉として「日流」小説が登場し、日本小説の大量流入を警戒する気配も見られるが、撒き散らされた『大望』の例などから見ても、日本文学が「翻訳」として認識される傾向は少なかった。つまり日本文学が、翻訳という観点で、研究者の目に入らなかったのである。しかし、日本の文学は、厳然と翻訳を介して私たちの前に登場した「他者」である。この点を十分に認識した翻訳研究が要求される。日本文学を読む読者たちは、日本文学および、翻訳された作家に関する情報も不足している上、原文と翻訳書の比較を通して翻訳を評価することができない。訳文を読むだけでは良質な翻訳は判別できない。日本文学を原文で読むことができる研究者は、したがって、翻訳の現場に積極的に介入し、日本文学の異質性と外来性を示さなければならない。

以上、いくつかの視点を考えてみたが、何よりもまずは、個々の研究者たちの恣意的で主観的な翻訳評価ではなく、日本の文学界で共有できる指標を通した、研究の活路を開拓することが要求される。しかし、いくら模範的な評価基準を作ったとしても、それは絶対的ではない。したがって、時代ごとに異なる翻訳が出てくることが予想される。時代とともに生きて動く、文学翻訳評価は「絶対的基準」や確固たる評価を躊躇し、不快にする。翻訳に関する絶対評価の不在が、逆に日本文学の翻訳研究の新天地を切り開くという点も見逃してはならない。そして、翻訳が実行される過程を注視することにより、日本文学が韓国内に翻訳商品として位置する現場の内的・外的構造を知ることができるようになる。さらに付け加えれば、このような膨大な韓国内の日本文学の翻訳に比べ、戦後の日本での韓国文学翻訳は、これまで非常に少ない分量にとどまっているという点である。翻訳が文化交流の一環でもあるならば、その不平等、不均衡、非対称の関係は、実に大きいということは見逃せず、これについても日本文学の翻訳研究と共に、考察されるべきである。

これまで日本文学の翻訳は、ある一定の部分で韓国文学を豊かにし、日本文化の理解に寄与した。韓国人は、翻訳を通して日本文学と交流することができる。日本文学は、韓国人の中の奥深いところに位置している。遠くにいるようであって、非常に近くにいるのである。つまり「翻訳」という経路を介し、深く内在しているのである。日本文学の翻訳研究は、これまで提示したもの以外にも、多角的な側面から構成されており、日本文学研究の一つの軸に新しい転機を設ける方向に進まなければならない。

(日本語訳・井ノ上佐織)

参考文献

- 강우원용(2012), 「1960년대 일본문학 번역물과 한국-‘호기심’과 ‘향수’를 둘러싼 독자의 풍속-」, 『일본학보』 제93집, 한국일본학회, Uwonyong, G.(2012), 1960nyeondae ilbonmunhag beonyeogmulgwa hangug- 'hogisim'gwa 'hyangsu'leul dulleossan dogjaui pungsog-, *Ilbonhakbo* 93, Hangugilbonhakoe, p.92.
- 국립국어연구원 편(1993), 『번역 출판물의 오역에 관한 기초적 연구 조사 보고서』, Kook Ribgukyeonguwon (1993), *Beonyeog chulpanmului oyeoge gwanhan gichojeog yeongu josa bogoseo*, p.1.
- 김보라(2012), 『2000년대 일본문학의 국내 번역 출판 양상과 베스트셀러 요인에 관한 연구』, 중앙대학교 석사 논문, Bora, K.(2012), 2000nyeondae ilbonmunhagui gugnae beonyeog chulpan yangsanggwa beseuteuselleo yoina gwanhan yeongu, Chungangtaehakkyo soksanonmun, p.17.
- 권정희(2007), 「일본문학의 번안-메이지 ‘가정소설’은 왜 번역이 아니라 번안으로 수용되었나」, 『아시아문화 연구』vol.12, 경원대학교아시아문화연구소, Jeonghui, G.(2007), Ilbonmunhagui beonan-Meiji 'gajeongsoseo' eun wae beonnyeogi anira beonaneuro suyongdoeeonna, *Asiamunhwayeongu* 12, Gyeongwondaehakgyoasiamunhwayeonguso, p.207, 223.
- 박유하(1995), 「20세기 日文學의 발견」을 내면서」, 다카하시 겐이치로, 박혜성 옮김, 『우아하고 감성적인 일본 야구』, 웅진출판, Yuha, P.(1995), '20segi Ilmunhag balgyeon'eul naemyeonseo, Tak'ahashi Kenich'iro, Hyesong, P. *Uahago gamsangjeogin ilbonyagu*, Ungjinchulpan, pp.214-215.
- 박재희 역(2005), 『大望』 제1권, 동서문화사, Jaehui, P.(2005), *Daemang* vol.1, Dong Seomunhwasa, pp.21-22.
- 백철(1969), 「어느 外國文學보다 우선 日本文學을」, 『日本短篇文學全集』 V, 新太陽社, Cheol, B.(1969), Eoneu oegungmunhakboda useon Ilbonmunhageul, *Ilbondanpyeonsosed/jeonjip* vol.5, Sintaeangsa, p.4.
- 城山三郎, 康曙海 譯(1980), 『現場小説 人間大望 1 百戰百勝』, 韓國法曹社, Saburo, S., Seohae, G.(1980), *Hyeonjangsosed ingandaemang 1 baekjeonbaekseung*, Hangukbeopjosa, p.2.
- 아오노 소오 외, 권택명 역(1996), 『제비등지가 있는 집의 침입자 일본 현대문학 대표작가 자선집』, 신구미 디어, Sou, A., Taekmyeong, G.(1996), *Jebidungjiga inneun jibui chimipja ilbon hyeondaemuhang daepyojakga jaseonjip*, Singumideo, p.13.
- 오경순(2010), Gyeongsun, O.(2010), 『번역투의 유희』, 이학사, *Beonnyeektuui yuhok*, lhaksa, p.33.
- 오에 겐자부로, 신인섭 옮김(1997), 『동시대 게임』 오에 겐자부로 소설문학 전집 ⑪, 고려원, Kenzaburo Ō., Inseop, S.(1997), *Dongsidae geim*, Ōe Kenzaburo genjaburo soseolmunhang jeonjip vol.11, Goryeowon.
- 유은경(2011), 『소설 번역 이렇게 하자』, 향연, Eungeong, Y.(2011), *Soseol beonnyeong ireoke haja*, Hyangyeon, pp.7-8.
- 유종호(2011), 『과거라는 이름의 외국』, 현대문학, Jongho, Y.(2011), *Gwageoraneun ireumui oeguk*, Hyeondaemunhak, p.113.
- 윤상인 외(2008), 『일본문학 번역 60년 현황과 분석』, 소명출판, Sangin, Y.(2008), *Ilbonmunhang beonnyeong 60hyeon hyeonhwanggwa bunseok*, Somyeongchulpan, p.4.
- 윤지관(2013), 「문학번역 평가-누가 어떻게 할 것인가?」, 이창수·임향옥 편저, 『통번역학 연구 현황과 향후 전망 II』, 한국문화사, Jigwan, Y.(2013), *munhagbeonyeog pyeongga-nuga eotteohge hal geosinga?*, *Tongbeonyeoghag yeongu hyeonhwanggwa hyanghu jeonmangtyu II*, pp.342-355.
- 이부세 마사지, 김춘일 역(1999), 『검은비』 한림신서 일본현대문학대표작선 ⑩, 小花, Maseujim I., Chunil, K. (1999), *Geomeunbi*, Hallimsinseo ilbonhyeondaemunhakdaepyojakseon ⑩, Sohwa.
- 이한정(2010), 「일본소설의 한국어 번역 현황과 특성-2006년 이후를 중심으로-」, 『일본어문학』 vol.51, 일본어문화회, Hanjung, L.(2010), Ilbonsoseorui hangugeo beonnyeong hyeonhwanggwa teukseong, *Ilboneomunhak* vol.51, Ilboneomunhakoe, pp.339-340.
- 임미진(2012), 「번역」을 둘러싼 제국일본과 식민지조선의 정치학-1940년대 일본에 소개된 조선소설을 중심으로」, 『민족문화사연구』 vol.48, Mijin, I.(2012), 'Beonnyeogeul dulleossan jegugilbongwa singminjijoseonui jeongchihak-1940nyeondae ilbone sogaedoen joseonsoseoreul jungsimeuro」, 『Minjongmunhaksayeongu』

48, p.194.

임중한(1993), 「역자의 말」, 『大夢』 1권, 매일경제신문사, Jonghan, I.(1993), yeok-ja-ui mal, *Daemong* 1, Maelgyeongjesinmunsa, p.7.

정혜용(2012), 『번역 논쟁』, 열린책들, Hyeoyong, J.(2012), *Beonnyeong nonjaeng*, Yeollinchaekdeul, p.137.

許文列(1981), 「大轉換期の 政治革命・經濟革命・人間革命の 이야기」, 『실록대하소설 大業』, 三韓文化史, Heo Mundod, H.(1981), daejeonhwangiui jeongchihyeogmyeong gyeongjehyeogmyeong inganhyeogmyeongui iyagi, *sillogdaehaseol daeob*, samhanmunhwasa, p.2, 12.

櫻井信栄(2010), 「半井桃水 『鷄林情話 春香傳』 について」, 『일본학』 vol.31, 동국대일본학연구소, Nobuhide, S.(2010), Nakarai toseui gyerimjeonghwa chunhyangjeone daehayeo, *ilbonhan* 31, Donggukdaehak-gyolilbonhangnyeonguso, p.225.

館野哲・蔡星慧 譯(2012), 『韓国における日本文学翻訳の64年』, 出版ニュース社, Akira, T., Seonghye, C.(2012), *Kakokkuniketunihonbungakuhonyakuno64nen*, Syutppannyuseusa.

최관(2012), 「한국에서 일본고전문학연구 동향-2005년~2011년을 중심으로-」, 『일어일문학연구』 제83집, 한국 일어일문학회, Gwan, C.(2012), Hangugeseo ilbongojeonmunhagyeongu donghyang-2005nyeon~2011 nyeoneul jungsimeulo-, *ireoilmunhangnyeongu* 83, Hangugireoilmunhakoe, p.74.

『매일경제』, 1994년 10월 30일, Maelgyeongje, 1994.10.30.

『연합뉴스』 2014년 6월 29일, Yeonhamnyuseu, 2014.6.29.

<http://www.wochikochi.jp/special/2011/05/taten.php> (2014년 5월 23일 검색)

<http://www.yonhapnews.co.kr/> (2014년 6월 30일 검색)

<http://www.yonhapnews.co.kr/> (2014년 7월 23일 검색)

李漢正 Hanjung LEE

(韓国) 祥明大学校日本語圏地域学専攻副教授。日韓比較文学、日本近現代文学、翻訳論、在日ディアスポラ研究。『日本文学の受容と翻訳』(ソウル：ソミョウン出版, 2016)、「1945年以降の日本における韓国文学の翻訳現況」(『韓国学研究』46, 仁河大学校韓国学研究所, 2017) など。